

## 今週の為替相場見通し(2022年5月9日)

| 総括表      |      | 注 | 先週の値動き          |        | 今週の予想レンジ        |
|----------|------|---|-----------------|--------|-----------------|
|          |      |   | レンジ             | 終値     |                 |
| 米ドル      | (円)  |   | 128.62 ~ 130.80 | 130.53 | 128.50 ~ 131.50 |
| ユーロ      | (ドル) |   | 1.0483 ~ 1.0642 | 1.0548 | 1.0450 ~ 1.0600 |
| (1ユーロ=)  | (円)  |   | 136.55 ~ 138.15 | 137.67 | 136.50 ~ 139.00 |
| 英ポンド     | (ドル) |   | 1.2276 ~ 1.2637 | 1.2339 | 1.2200 ~ 1.2450 |
| (1英ポンド=) | (円)  | * | 160.32 ~ 163.91 | 161.21 | 159.50 ~ 162.50 |
| 豪ドル      | (ドル) |   | 0.7031 ~ 0.7267 | 0.7074 | 0.6900 ~ 0.7200 |
| (1豪ドル=)  | (円)  | * | 91.50 ~ 94.03   | 92.39  | 90.50 ~ 94.00   |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 原田 和忠

(1) 今週の予想レンジ: 128.50 ~ 131.50 円

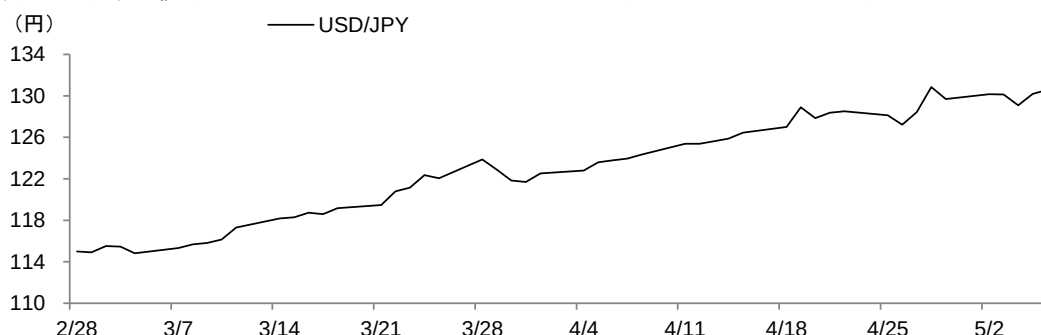
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は値幅を伴いつつも方向感のない展開。週初2日、130円ちょうどでオープンしたドル/円はオープン後に下げ幅を拡げるも、米長期金利の急上昇や大型連休を控えた実需のドル買いに130円台半ばまで上昇。海外時間では米4月ISM製造業景況指数の冴えない結果や株式市場の軟調推移に129円台後半まで値を崩し方向感に欠ける展開となった。3日、ドル/円は日本が休場で取引参加者が少なく、アジア時間は商いが閑散。欧州時間に上値を伸ばす場面もあったが、FOMCを翌日に控えポジション調整主体の方向感に欠ける値動きが継続、終日を通し130円台前半を中心に揉み合いとなった。4日、FOMCを直前に控えアジア時間、欧州時間は様子見、130円を挟んでの小動きが継続。FOMCでは、発表直後上値を伸ばすもその後は+50bpsの利上げと量的引き締め開始の決定と政策内容がほぼ市場の想定内に留まり、その後のパウエルFRB議長の会見で次の+75bpsの利上げに否定的な考えを示すと一気に週安値の128.62円まで急落。5日、ドル/円は前日からの売り一巡後は株式市場の軟調推移や米金利上昇を背景にドル買いが強まり、一時130.55円まで急伸、FOMC発表前の水準まで値を戻した。6日は、130円台を中心としたレンジ推移に。注目の米4月雇用統計は、非農業部門雇用者数変化は予想を上振れたものの、失業率等の家計調査は予想比下振れと強弱まちまちの展開に材料視されず。結局、ドル/円は130.53円で越週した。

今週のドル/円相場はレンジ相場を予想。先週のFOMCでは予想通り、+50bpの利上げと量的引き締め開始の決定。6月と7月の会合も同じく+50bpの利上げを検討するとして。一方で、一部で観測のあった+75bpの利上げは否定的であったことで、ややハト派寄りな会合となり、リスク資産も落ち着きを取り戻したかに見えた。しかしながら、5日からは再び米株売り、債券売りとなるボラティリティに伴う展開。リスク資産は足許で軟調推移が続いており、このまま利上げが続けばリセッションに陥る可能性が相応に高いことは、市場参加者も気付き始めていると思われる。先日のBOEの結果でも、景気の先行きに悲観的であったことはその証であろう。ことドル/円相場については、130円台で落ち着いた動きを見ていることから、同レベルでのレンジ推移を見込む。一方で、リスク資産のボラティリティは高まっており、急なドル/円下落の動きには留意したい。尚、今週は9日(月)に米3月卸売在庫、11日(水)に米4月CPI、12日(木)に米4月PPI、13日(金)に米4月輸入物価指数と米5月ミシガン大消費者信頼感指数が発表予定。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き: 安値 128.62 円 高値 130.80 円 終値 130.53 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 1.0450 ~ 1.0600 136.50 ~ 139.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場はFOMCの結果がほぼ事前の内容通りだったことからドル売りが強まり1.06台前半まで急伸するも、米金利の急上昇や株式市場の急反落に1.05台半ばで越週。週初2日、ユーロ/ドルはドル売りに1.0510まで下落するが多くの市場が休場となり薄商いの中、1.0569まで一時戻した。しかし欧州がロシア産のガス代金支払いに関する詳細なガイダンスを数日中に発表すると伝わると1.0491まで下落。その後軟調な株式市場が買い戻される展開に下げ渋り、1.05台を回復。3日、前日のドル売りの流れを引き継ぎ1.0578まで戻す。ラガルドECB総裁の「ECBは金融政策の適切な伝達を確実にしたい」との発言があったものの特段反応無。その後、ユーロの利益確定の売りが持ち込まれ、1.0512まで反落。その後シュナーベルECB専務理事が、「資産購入は利上げ前に終了させ、恐らく6月に終了し、7月に利上げが可能。」と話したが、翌日のFOMC結果発表を控え、狭いレンジ推移でクローズ。4日はドル売りが先行し1.0555まで戻すが、その後ドルが買い戻されたことから1.0525まで反落。FOMC結果を受け一旦上下するものの、最終的にはドル売りに1.0631まで戻し、1.0622でクローズ。5日はドル買いが継続したことから1.0494まで下落。午後も安値圏での推移が暫く続いたが、終盤に掛けて米金利がやや落ち着く展開にドルが売られ1.0539でクローズ。週末6日のユーロ/ドルは、ドル買いに一旦1.0483まで下落したが、1.0470がサポートと意識されていることから下げ渋り、午後はドル売りが持ち込まれたことから1.0592まで戻し、1.0566でNYオープン。米4月雇用統計の結果を受けたドル売りに、一旦1.0598まで戻すが、その後ドルが買い戻されて1.0548まで反落。1.0580付近での推移が続いたが、午後に入り上昇していた米金利が更に上昇すると、ユーロ/ドルの上値を重くし、1.0537まで下落し、1.0548で越週。

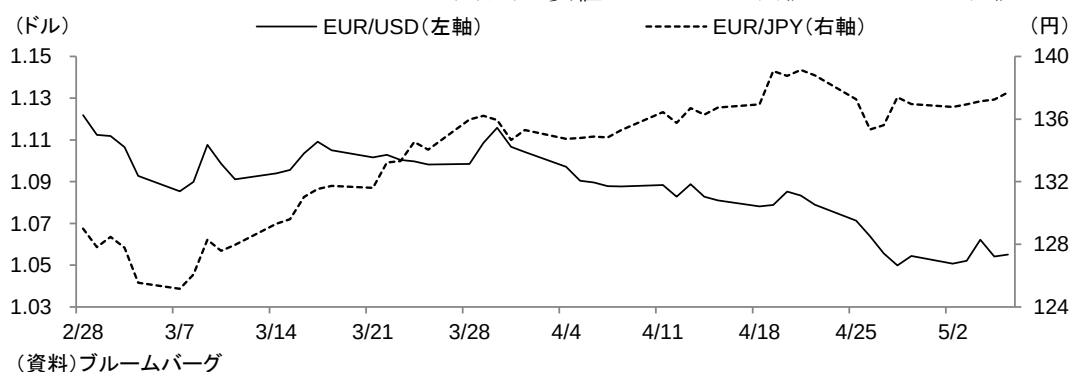
今週のユーロ/ドル相場は上値の重い推移を予想する。米金融政策の結果を受けてドルの売買にユーロも振られて、一時1.06台を回復する場面も見られたが、ウクライナ情勢を背景に欧州圏に明るい材料に欠けることから、積極的なユーロ買いにはならないであろう。ウクライナ危機終息となればユーロ相場が復調する可能性が高いが、経済制裁の引き締め等、長期戦は避けられないだろう。それは、欧州圏のエネルギー問題による資源価格の高止まりやインフレ継続により、中長期的に経済成長を抑制することになる。また、9日のロシアの対独戦勝記念日に一定の「戦果」を示すために、一段とウクライナへの攻撃は強まっている。6日のロシア外務省がウクライナの軍事作戦には核兵器を使わないとの発言はあったものの、緊張感は尚も継続。欧州圏への投資は控える投資家が多いと思われるため、ユーロの上値の重い推移を予想する。その他重要イベントは10日(火)ユーロ圏5月ZEW景気期待指数、13日(金)ユーロ圏3月鉱工業生産が予定されている。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0483 高値 1.0642 終値 1.0548

(対円) 安値 136.55 高値 138.15 終値 137.67



## 3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2450 159.50 ~ 162.50 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨に対し全面安。週前半は穏やかな全面軟調にとどまったが、週央の乱高下を経て水準を切り下げ、振り返ってみれば予想外に明確なポンド安となった。週明け2日は英休日。先週は日本の連休(3日~5日)が重なったこともあり動意に乏しい滑り出しとなった。様子見気分が強かったもうひとつの理由は、4日に予定された米連銀公開市場委員会(FOMC)の結果待ち。FF金利の+50bp引き上げ(利上げ後0.75~1.00%)や、バランスシートの段階的縮小(6月以降)などの決定は市場の予想に沿った内容だったものの、パウエルFRB議長の発言が、市場の一部で観測された+75bp幅の利下げに消極的と受け止められたことで、ドルは全面急落に転じた。この局面、ポンドも対ドルでは、週の高値となる1.2637まで反発したものの、対円や対ユーロでの上昇は限定的に止まった。更に5日、英中銀金融政策委員会が基準金利の+25bp引き上げ(利上げ後1.00%)を発表。この決定自体は予想通りだったものの、6対3の多数決で3票の+50bp利上げ票が投じられたことが伝わると、市場はまずポンド買いで反応。しかし、その後、2委員が利上げ打ち止めを示唆したこと、更に2023年の英GDP予想が大幅下方修正(+1.2%→0.0%)されたことなどが明らかになると、一転、ポンドは全面反落。翌6日の欧州時間朝までに、対ドルでは、2020年6月末の安値を更新する1.2276まで下落。対円、対ユーロなどでも下押し、そのまま安値圏で週の取引を終えた。

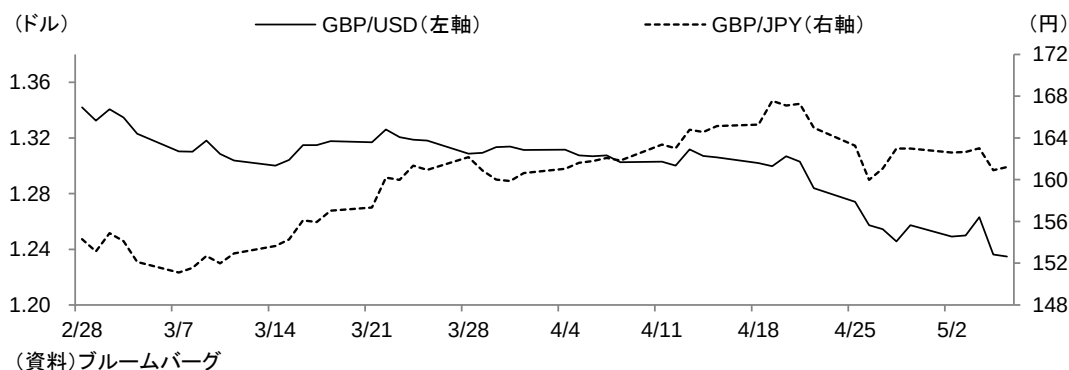
今週の英ポンド相場は、軟調推移継続を予想。昨年12月、主要国の先陣を切って利上げ(+15bp)に踏み切った英中銀だが、その後、同銀の金融引き締め姿勢は迷走している感が拭えない。事実としては、以降、3会合連続で+25bpの利上げを実施しているにもかかわらず、そのような印象を受けるのは、ウクライナ戦争という特殊事情が状況を複雑にしているせいもあるだろうが、同銀と市場との対話に問題があるからではなかろうか。有体に言えば、物価抑制と景気浮揚のどちらに軸足を置くのか、その姿勢が揺れ動いているように思われるということだ。米連銀にしても、物価上昇は「一過性」としてきたスタンスから、現在の積極的な利上げ姿勢との間には大きな変転があったものの、少なくとも、金融政策正常化を目指す方向感(加速、減速の緩急はありながらも)一貫しており、ぶれることはなかったように思われる。軸が定まらないのは英政治も同じで、5日投票された英地方選では、予想通りジョンソン首相率いる(中央政界における)与党保守党が大敗を喫したものの、保守党を見切った票は、最大野党労働党に流れ込んだというよりは、自由民主党、緑の党、無所属などの幅広い第三の勢力に分散してしまった。ウクライナ戦争という巨大な不透明感が世界経済の先行きに暗雲を投げかける現状で、英中銀金融政策、英政治の腰が定まらない状況は、ポンドの先行きに重石となる可能性はあっても、ポンド押し上げに寄与する可能性は低いのではないかと。英経済指標は、12日(木)に、英1~3月期GDP暫定値、英3月鉱工業/製造業生産、英3月貿易収支などの発表が集中するが、英中銀金融政策委員会の翌週で、ウクライナ戦争の影響が完全には反映されないであろう数字が、ポンドの先行きに大きく影響する可能性は低いものと思われる。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2276 高値 1.2637 終値 1.2339

(対円) 安値 160.32 高値 163.91 終値 161.21



## 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 0.6900 ~ 0.7200 90.50 ~ 94.00 円

## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上に往って来いの展開となった。2日、0.70台後半でオープンした豪ドルはRBA理事会を翌日に控える中で、豪金利・株式市場の動きを受けて浮沈する動意の乏しい展開。翌3日はRBAの政策金利発表前に豪ドル買いが先行し0.71ちょうど付近まで上昇。注目されたRBA理事会では10年ぶり利上げが決定。政策金利(オフィシャルキャッシュレート)は0.25%引上げられ、0.35%(市場予想は0.25%)となった。これを受けて豪ドルは0.71台半ばまで急伸、一巡後は翌日にFOMCを控えていることもあり0.71ちょうど付近での動意薄の展開となった。4日、注目されたFOMCでは、市場予想通り0.50%の利上げが決定された。しかし、その後のパウエルFRB議長の記者会見において「0.75%の利上げは積極的に考えていない」との発言が確認されると、米ドル売りが強まったことで豪ドルは0.7265まで急上昇した。5日、序盤は0.72台半ばを維持していたが、豪金利が低下する中で徐々に豪ドル売りが強まる展開に。加えて、米国時間に株式市場が大幅下落に転じるなどリスクセンチメントが悪化すると、豪ドルは0.71ちょうど付近まで値を下げた。RBAやFOMCを受けた上昇分を吐き出した豪ドルは6日は0.71ちょうど付近での動意薄の展開となり、0.70台後半で越週している。

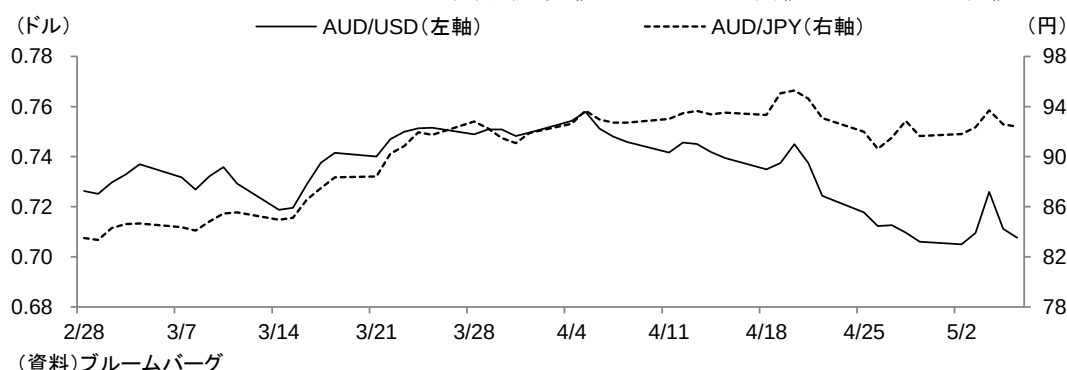
今週の豪ドル相場は基本的には動意に乏しい展開を想定も、下値リスクに警戒したい。先週回顧とも重複するが、RBAとFOMCそして米雇用統計と注目度の高いイベントを消化。豪ドル市場においては豪州・米国の金融政策を受けた豪ドル騰勢は続かず、週後半にかけて上昇分を全て吐き出しており相場に一巡感が見られる。特段材料が見当たらない今週においては、債券市場・株式市場を睨みながらの浮沈にとどまると考えており、基本路線としては動意薄の展開になるのではと考えている。ただし、足元株式市場は金融引き締めを嫌気したリスク回避の地合いが強まりやすい印象もある。ウクライナ露情勢と合わせて、リスクへの警戒を払いたい。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(5/2~5/6)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7031 高値 0.7267 終値 0.7074

(対円) 安値 91.50 高値 94.03 終値 92.39



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。